



今月号から新連載が始まります。執筆陣は「日光ふるさとボランティア」の皆さんです。精力的に日光の史跡調査を続けている会員の皆さんが、厳選した十二のポイントをご紹介します。ご期待ください。

●「日光ふるさとボランティア」は、今から約九年前に中央公民館が「史跡・もうひとつの日光」をテーマに開催した故郷講座を契機にして誕生しました。日光の歴史の奥深さに感銘した受講生の内、更に勉強したい研究したいという有志が集まり、「史跡の勉強と自然界での遊び」を目的に、その延長として史跡ガイドを務めるボランティア・グループを結成したのが発端です。会の略称は「FVC(ふるさとボランティアサークル)」。当初九人(女性八、男性一)でスタートした会員も、今では十三人(女

性九、男性四)になりました。●研究活動は、史跡についての文献調査から始まり、石碑・石像・石祠などの刻字調査を行います。そうした調査の結果は、手作りの小冊子「ふるさとの散歩道」にまとめていきます。第一集の発行は平成元年。平成七年に第四集を発行しました。現在、第五集を作成しています。これが完成すると、日光市の隠れた史跡の約半分を紹介できることとなります。

また、平成八年にはそれらの総集編として著した案内書「もうひとつの日光を歩く」が出版社から発売されました。

●史跡ガイドの活動は、県内の公民館や学校の家庭教育学級などが開く講座や研究会の案内役として、多くの皆さんに喜んでいただいています。過去七年間に九四グループ、三六五四人を案内して来ました。「FVC」は観光ボランティアではありませんので、公共の目的を持ったグループだけを案内しています。

●自然が大好きな「FVC」の活動は史跡を勉強するだけでなく、ハイキングや登山、冬はクロスカントリー・スキーもしています。花を求めて白根山や男体山にも登りました。勿論、山の中に史跡があると聞けば出かけて行き、勝道上人の分骨地の「瑠璃ヶ

壺」など、楽しみながら探索の成果をあげています。



(第一回)

中ソネの観音様

中ソネの観音様は、優しい顔をした石仏である。台座からの高さは一・三メートル。蓮台に坐した姿は端正で、下から見上げた顔が美しい。この観音様は、中ソネの洞窟内に安置されているので、そう呼ばれる。中ソネの「ソネ」とは尾根のことである。

中ソネの観音様は、「日光の故実と伝説」(星野理一郎著)に掲載されており、ぜひとも訪れて

みたい場所だった。しかし、私達が訊ねた限りでは、中ソネがどこにあるのか知っている人はいなかった。そんなことから、会員達で探索を始めることにした。幾度となく鳴虫山の山中を探し回った挙句、平成四年の一月三日、やっと目指す洞窟と観音様を発見することができた。待ちに待った感動の体面の瞬間だった。

洞窟内を調べたところ、観音様は古く、刻銘は承応四乙未年二月十八日(※一六五五年)とある。傍らの石柱に岩屋観世音と刻字されているから、正しくは「岩屋観音」と呼ぶべきなのだろう。

洞窟の形状は、概ね、高さ一・六メートル、幅三・八メートル、奥行三・五メートル。面積は八畳間ほどの広さである。その中に、「はるばると登りておがむ観世音いわの松風すずしかるらむ」と書かれた額が掲げてあったそうだが、今は釘だけが残されている。

江戸時代から明治期にかけて、洞窟内に官憲の目を逃れた博徒が集まり、賭事をしていたとの話しが伝わっている。

この中ソネへは、天理教の左側から志渡淵川の左岸に沿って西に進み、橋を渡ればそこが車道の終点で、右が志渡淵川、左が

船ヶ沢。その間の急な尾根を登ること約一時間。標高八〇〇メートルの辺りに目指す洞窟がある。その昔、この尾根は鳴虫山の修験道だった。洞窟の分岐には「右なきむし山」「左かんおん堂・女講中」の小さな道しるべが残されている。現在は、分岐から洞窟まで黄色の誘導板の目印がある。

なお、ここから鳴虫山へ登るのは、山中へ進むにつれて道が不鮮明になるので、お勧めできない。(室井正松・文)

●参考文献「もうひとつの日光を歩く」(日光ふるさとボランティア編)

